

音楽療法での評価を活用した連携の構築

ーセッションの個別評価表の活用を通してー

日高 まり子

要約

外部講師として施設等での音楽療法のセッション[※]を実施するにあたって、対象者の支援者となる職員との関係性の構築は重要である。しかし、音楽療法を実施するねらいは共有されていても実際のセッションでの音楽活動の支援には積極性や主体性がみられない場面に出会うことも多い。その要因として、セッションの音楽活動内容への支援方法が理解できていないことや対象者の音楽療法での個別目標が明確にされていないことなどが考えられる。筆者もセッションを実施する上で、セッションの質の向上を目指して職員との関係性について模索をした。セッションにおける対象者の活動チェックとして個別評価表を提示し、導入した。筆者が施設で実践した数年にわたる記録を分析し、施設の職員との連携構築のために導入した個別評価表を活用することで、セッションのプログラムの検討と工夫や職員の対象者への支援に変容がみられてきた。個別評価表活用の有用性について1事例としてまとめたものである。

※本文におけるセッションとは、音楽療法の個別およびグループでの種々の音楽活動の総称である。

キーワード：音楽活動、音楽療法、セッション、評価表、施設、外部講師

1 はじめに

音楽療法においては、対象者に関する情報を収集し分析するアセスメント、アセスメントから得た情報から身体的、心理的、感覚的な課題を明確にし、長期目標や短期目標の設定、対象者に合わせたプログラムを設定、プログラムの実践、終了後の実施記録と評価、振り返り、というプロセスで基本的には実施される。筆者が音楽療法を実施した施設では入所者に対する療育を充実させることを目的として、音楽療法の時間を設定している。その施設での3年4か月間の音楽療法のセッション48回の実践において、セッションの支援者として参加する施設の職員との関係性について、様々な課題を感じるがあった。音楽療法を展開する上で、対象者のセッションでの活動を充実させるためには、セッション時に支援者となる施設の職員との関係性の構築が、その目的を達成するために重要である。本研究では、外部専門家としてセッションを実施してきた筆者が導入した個別評価表の活用によって変化した施設の職員との連携の構築について筆者の実践記録から考察するものである。

2 音楽療法の実践

(1) 音楽療法の定義

音楽療法は、対象者の身体状況や認知力、精神的な状態などの困り感に対して音楽を意図的に使用する療法で、一般社団法人日本音楽療法学会では「音楽の持つ生理的、心理的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質と向上、行動の変容などに向けて音楽を意図的、計画的に使用すること」と

定義されている。

個人またはグループ、集団などの形態で実施され、鑑賞活動などの受動的な活動や歌唱や器楽演奏、身体表現などの能動的な活動が行われる。音楽療法の目的として、子どもの発達支援、健康維持・介護予防、病後・事故後のリハビリテーション、学習支援、リラクゼーション、認知症の症状の緩和、痛みの緩和、心のケアなどが挙げられている。また、音楽療法の活動は、よりよい生活の向上（QOLの向上）につながるといわれ、音楽と人とのかかわりによって、孤立を防ぎ、人との交流を促し、子どもの心身の発達、社会性の発達、問題行動の減少、介護予防、言語や身体のリハビリテーション、コミュニケーションの発達や回復、心の安定、精神的な成長などの効果があげられている。

(2) 音楽療法のプロセス

一般的な音楽療法は、「アセスメント」、「目標設定」、「プログラム実践」「記録」「評価」の手順で実施される。

1) アセスメント

対象者の症状や状態など全体像を知ることで「査定」や現時点の「評価」をする。目標やプログラム設定をする情報として必要なものである。障害名や障害の程度や麻痺、発作の有無などの情報、運動面として歩行や姿勢、手や指などの動きなど粗大運動や微細運動の様子、発語などの言葉の理解などの認知面の様子、多動傾向、不安傾向、集中度などの行動面、さらに音や音楽への関心・意欲などの情報を収集して、分析・評価していく。

2) 目標設定

セッションの目標設定では、アセスメント結果を活用して長期目標(1年程度)と短期目標(3ヵ月程度)を設定する。グループや集団でセッションを行う場合は、グループの目標に加えて、個別の目標設定も必要である。

3) プログラム実践

設定した目標に合わせて具体的な内容のプログラムを計画する。以下に示したプログラムの例のように活動の流れは、パターン化されることが多い。個別セッションの場合は、対象者のコンディションに合わせて違ったプログラムを実施する場合もある。

【プログラム(例1)】

始まりの歌・あいさつ

導入活動（身体活動を伴うあそび歌、わらべうた、リクエスト曲など）

即興表現（楽器演奏、身体活動）

鑑賞・身体表現活動（布、ボール、リボン、小楽器、などを使っての活動も含む）

器楽・歌唱活動（アンサンブル、合奏、合唱、など）

終わりの歌・あいさつ

【プログラム(例2)】 ※宮崎学園短期大学音楽教育センターで実施されているプログラム例

※中島・山下(2002)

始まりの歌・あいさつドラム

手遊び・歌遊び

小プレイ（簡単な、まとまった遊び、活動のウォーミングアップとして行う。）

リズム・ムーブメント（心身リズムのバリエーションを模倣や象徴活動、ダンスで経験する。）

リラクゼーション

音づけ絵本・音語り

大プレイ（セッションの中心となるメインの活動、楽器演奏と一緒にする場合もある。）

楽器演奏

終わりの歌・ドラムあいさつ

1) 記録

形式は決まっていない。どのようなプログラムで、どのような活動を行ったのか、対象者の様子などについて自由な形式で記録する。客観的な対象者の観察をすること、対象者の反応の変化、セッション内容の振り返りなどを記録する。

2) 評価

記録をもとに対象者、対象グループの目標の達成度などについて評価していく。対象者の目標設定の検討やセッションの効果について客観的視点をもつこと、関係職員とのセッション内容についての共有などにつながるものである。評価項目・内容についての指定された形式はないが、セッションの実施内容等によってそれぞれに作成されている。日本音楽療法学会特別プロジェクト特別委員会の研究において「音楽療法セッション記録表」として評価表(図 1)、また、高齢者向けではあるが「音楽療法因子評価表」が学会等で特別プロジェクトとして報告され、学会ホームページに掲載されている（日本音楽療法学会、n.d.）。

年 月 日() 回目								記録者
展開部で評価する			セッション全体で評価する					
歌唱	楽器活動	身体活動	参加度	表情	社会性	認知	特記事項	
対象 1								
対象 2								
対象 3								
対象 4								
対象 5								
対象 6								

図 1 音楽療法セッション記録表 特別プロジェクト特別委員会 MT チーム作成（2013. 6. 30）
（出所：日本音楽療法学会（n.d.））

「展開部の活動で評価する」	「セッション全体で評価する」
<p>歌唱活動</p> <p>0. 参加しない</p> <p>1. 個別に促されれば参加する</p> <p>2. 自発的に一部参加する</p> <p>3. 自発的に半分参加する</p> <p>4. 自発的に全てに参加する</p> <p>楽器活動</p> <p>0. 参加しない</p> <p>1. 個別に促されれば参加する</p> <p>2. 自発的に一部参加する</p> <p>3. 自発的に半分参加する</p> <p>4. 自発的に全てに参加する</p> <p>身体活動</p>	<p>参加度</p> <p>0. 参加しない</p> <p>1. 個別に促されれば参加する</p> <p>2. 自発的に一部参加する</p> <p>3. 自発的に半分参加する</p> <p>4. 自発的に全てに参加する</p> <p>表情</p> <p>0. 表情に変化がない</p> <p>1. 個別に促されれば表情が変化する</p> <p>2. 自発的な表情の変化がセッションの一部に見られる</p> <p>3. 自発的な表情の変化がセッションの半分に見られる</p> <p>4. 自発的な表情の変化がセッションの全てに見られる</p> <p>社会性（人への関心）</p>

0. 参加しない	0. 人に関心を示さない
1. 個別に促されれば参加する	1. 個別に促されれば、人に関心を示す
2. 自発的に一部参加する	2. 自発的に特定の人に関心を示す
3. 自発的に半分参加する	3. 自発的に複数の人に関心を示す
4. 自発的に全てに参加する	4. 自発的に全ての人に関心を示す
認知 (理解)	
	0. 状況を全く理解できない
	1. 個別に促されれば、状況を理解できる
	2. 自発的に状況の一部を理解できる
	3. 自発的に状況の半分を理解できる
	4. 自発的に状況の全てを理解できる

図2 高齢者音楽療法因子評価表 SP-1 (日本音楽療法学会特別プロジェクト研究(2013.5.12)
 (出所: 日本音楽療法学会 (n.d.))

3 実践記録の分析から

筆者は、セッションの実施内容から、Ⅰ期: 初期段階 (第1回~第15回)、Ⅱ期: 評価表導入段階 (第16回~第30回)、Ⅲ期: 評価活用段階① (第31回~第42回)、Ⅳ期: 評価活用段階② (第43回~第48回) に分け、セッション内容や支援者の変容について分析をした。

(1) Ⅰ期 初期段階

セッションの始まりとセッションの方向性が確立される時期である。対象者との関係性はもちろんであるが、支援者である職員との関係を構築する初期段階の時期でもあった。

始まりでは、セッションの開始時の打ち合わせにおいて、前任者のセッションプログラムとは違った新たな活動を提案してほしいと要望があり、筆者の提案するプログラムで開始した。筆者がセッションプログラムを計画し、職員はセッションの当日に筆者より示されるプログラムに加わり、対象者に1対1で付いてサポートしていた。

プログラム(1)	プログラム(2)	プログラム(3)
① 導入「パブリカ」	① 導入 「騎士竜戦隊リュウレンジャーテーマ曲」	① 導入 「ひまわりの詩」
② 始まりの歌 「世界中の子どもたちが」	② あいさつドラム	② あいさつドラム
③ あいさつドラム	③ 即興演奏 オーシャンドラム	③ 即興演奏 エッグマラカス
④ 即興演奏	④ 身体表現・ダンス レインスティック	④ 身体表現・ダンス 「ぱびぷべぽっぽー」
⑤ あそび歌 「ゲータッチ」	⑤ 絵本 「ねばらねばなっとう」	⑤ あいさつドラム
⑥ 身体表現活動 「トマト体操」	⑥ 身体表現・ダンス 「アニマルスイミング」	
	⑥ あいさつドラム	

図3 Ⅰ期 セッションプログラム例

図3はこの時期のセッションで実施したプログラムを抜粋したものである。この時期の職員の支援は、

導入から展開、終結の各プログラムの目的や活動の意図を十分に理解できていない様子での支援が見られた。対象者たちも新しい指導者への認知がなく、緊張感も感じられた。特別支援学校等で活用していた楽曲なども積極的に取り入れていたが、提示する楽曲が職員の認知度が低いことや、セラピストである筆者が楽曲の特性を伝えきれていなかったこともあり、月に2回程度のセッションの回数での活動内容の定着度は低かった。

筆者は、セッション終了後にプログラムの振り返り、筆者が対象者の様子について30分程度の時間で記録を行っていた。活動記録は施設に提出してはいたが、対象者の活動の様子やプログラム内容についての振り返りは、時間的な設定が難しく、ほとんどされていなかった。職員からはプログラムや選曲について施設の行事に合わせたものを希望されることもあったが、基本的には筆者が提示されたプログラムを受容し、対象者たちと活動を楽しんでいるというだけの様子であり、消極的な支援を感じていた。セッションの回数を重ねる中で、筆者の設定するプログラム内容や実践方法への理解がみられるようになり、対象者たちも表情が和らぎ、活動を積極的に楽しむ様子が見られてきた。「指示があれば手伝いますから、遠慮せずに伝えてください。」という意見も聞かれる場面もみられるようになった。

(2) II期 評価表導入段階

対象者たちをサポートする職員の積極的な協力を得るために、セッション終了後に担当した職員が個別評価をする「活動の様子 チェック表

活動の様子 チェック表				
(月 日) ※各項目にチェックをお願いします。				
項目	児童生徒氏名		担当者	
活動への参加	自分からできた			
	声かけ等で参加できた			
	参加しようとする様子は見られた			
表現活動の様子	支援者と一緒に参加できた			
	周りの活動を感じている様子が見られた			
	参加できなかった			
関係性	声を出して歌うことができた			
	支援者と一緒に声を出すことができた			
	自分で楽器を鳴らすことができた			
情緒面	自分から手指を動かすことができた(動かそうとできた)			
	支援者と一緒に楽器を鳴らすことができた			
	身体への刺激を感じることができた			
関係性	取り組めなかった			
	友だちや支援者と一緒に積極的に楽しむことができた			
	周りの活動に関心を示すことができた			
情緒面	周りの活動に気づくことができた			
	音楽を感じて楽しく取り組めた			
	参加への意欲がみられなかった			
関係性	穏やかに参加することができた			
	興奮する場面が見られた			

図4 個別評価表

(図4 個別評価表)」を活用することを提案した。この個別評価表では、「活動への参加」「表現活動の様子」「関係性」「情緒面」の項目を設定し、活動のねらいを明確にした。また、職員への負担感がないように、短時間で簡単にチェックできる方法とした。チェック内容には支援方法についても対象者の実態に合わせた支援について感じ取れる段階的な評価内容とした。また、活動計画を事前に提示した。図5のようなプログラム表をセッション時に掲示し、対象者に活動の見通しをもたせるために視覚的な表示とともに、職員の支援のねらいも具体的に提示して支援の方法を明確にできるようにした。対象者の自発的、主体的な活動を尊重することをねらう場面において、

きょうのプログラム	
1	はじまり・あいさつ🎵
2	《あそび歌・季節の歌を楽しもう!》 ♪あなたがたどこさ ♪だから雨ふり
3	《音・音楽に合わせて身体を動かそう🎵》 ♪楽器の音 ♪風はともだち
4	《楽器演奏》 ベルで演奏しよう。 好きな楽器を音楽に合わせよう🎵
5	おわり・あいさつ🎵

図5 セッションで提示したプログラム表

支援において過剰な支援も見受けられていた。評価項目を参考にすることで、対象者の自主的・主体的な動きを支援するねらいについての共通理解もでき、適切な支援がみられてきた。

また、評価表を導入したⅡ期では、職員の音楽担当リーダーが交代した時期である。交代したリーダーによる担当職員への指示も的確で、チェック項目の内容が各対象者のセッションの目標として活用することができるようになってきた。また、対象者が積極的な活動をするために、セッションで使用する楽曲のアンケートを主体的に実施してくれた。そのアンケートでの希望曲をもとにプログラムを作成することで対象者の興味関心が高まり、職員の意欲的な支援も見られてきた。

(3) Ⅲ期 評価表活用段階①

Ⅲ期の評価活用段階の時期では、プログラムの構成(図6)が、①導入・鑑賞・始まりの歌「世界中の子どもたちが」「のびろのびろだいすきな木」・あいさつドラム、②音を感じる活動、③季節の歌、④楽器・身体活動・即興表現、⑤楽器演奏、⑥終結・終わりの歌「ただきみとして」「この地球に生まれて」・挨拶ドラム、として定着してきた時期である。対象者ともに職員も見通しをもった活動の支援ができるようになってきた。職員が活動内容から対象者の評価の視点を意識することで、支援に責任をもって取り組む姿も伺えた。

<p>はじまり・挨拶</p> <ul style="list-style-type: none"> ・BGM「世界中の子どもたちが」で集合。 ・「世界中の子どもたちの」の1フレーズと一緒に歌い、始まりを意識する。 ・一人ずつハンドドラムを鳴らし挨拶する。 <p>【季節の歌】</p> <p>季節を感じながら、みんなと聴いたり歌ったり布を揺らしたりする。</p> <p>「あきがあっきた」「くものうえで」</p>	<p>はじまり・挨拶</p> <ul style="list-style-type: none"> ・BGM「のびろのびろだいすきな木」で集合。 ・「のびろのびろだいすきな木」の1フレーズと一緒に歌い、始まりを意識する。 ・一人ずつハンドドラムを鳴らし挨拶する。 <p>【季節の歌】</p> <p>季節を感じながら、みんなと聴いたり歌ったり布を揺らしたりする。</p> <p>「もみじ」「くものうえで」</p>
<p>身体表現</p> <p>【「カマキリ」「アニマルランニング」で動いてみよう!】</p> <p>歌詞や旋律に合わせて、身体活動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の動きを楽しく身体表現する。 ・友達と一緒に楽しく活動する。 <p>・児童生徒の自発的、主体的な動きを支援する。</p>	<p>身体表現</p> <p>【「カマキリ」「アニマルランニング」で動いてみよう!】</p> <p>歌詞や旋律に合わせて、身体活動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の動きを楽しく身体表現する。 ・友達と一緒に楽しく活動する。 <p>・児童生徒の自発的、主体的な動きを支援する。</p>
<p>楽器演奏</p> <p>「Love so sweet : 嵐」or「鬼滅の刃/紅蓮華 : LiSA」or「パプリカ」</p> <p>【合奏する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・候補曲から曲を選択し楽器を決め、音楽に合わせてリズムを演奏する。 	<p>楽器演奏</p> <p>「Love so sweet : 嵐」or「鬼滅の刃/紅蓮華 : LiSA」or「パプリカ」</p> <p>【合奏する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・候補曲から曲を選択し楽器を決め、音楽に合わせてリズムを演奏する。
<p>おわり・挨拶</p> <p>「ただきみとして」を聴きながら、ハンドドラムでドラム挨拶する。</p>	<p>おわり・挨拶</p> <p>「この地球に生まれて」を聴きながら、ハンドドラムでドラム挨拶する。</p>

図6 Ⅲ期 セッションプログラム例

(4) Ⅳ期 評価表活用段階②

この時期においては、評価の項目の中から「活動への参加」の項目では、参加への意欲が高い傾向にあることが示されていた。対象者への職員の関わり方に明確な変化が出現している評価となってきた。支援の職員が評価表へ記入する時間には、対象者の参加の様子について話し合われる場面も多くみられた。対象者の表現活動への参加の変容や演奏などへの興味や意欲の変化、演奏の変化なども報告され、職員の

対象者の活動に対する意識の向上がみられていた。それらは、筆者の記録にも反映され、プログラムの検討につながっている。筆者の施設のニーズや対象者の実態に合わせたプログラムの創造力向上の必要性も強く感じられた時期となった。

3 考察

今回の個別評価表(図4)の提示により、職員の支援においてセッションの視点の変化を感じられるようになった。対象者の評価を通してセッション内容のねらいに対する共有性ももたれるようになったからであると考え。セッション後の評価時に評価項目をもとに対象者の活動の振り返りが聞かれるようになったり、活動内容についての感想やプログラムへの要望なども聞かれたりすることが多くなってきている。筆者と職員の対話も変化していることがわかる。それらの意見や要望は、次回のプログラムを検討することへとつながり、職員とともにセッションを作り上げようとする関係性の芽生えとして感じられた。セッションについて様々な語り合える関係性となってきた。

評価表を活用したことで、職員のセッションへの参加が単なる支援ではなく、対象者の活動をねらいをもった支援とすることができ、職員の主体的な参加につながっている。単なる支援者ではなく、セッションのねらいをもって参加する支援者へ変容している。外部専門家による施設等での音楽療法は多くなされているが、施設の職員の主体性が見られない場合もあり、そこでは職員との関係性が課題となる。この実践研究で使用した職員に負担感のない簡単な振り返りのできる評価表の活用は、対象者の課題を明確にし、対象者の活動を共有できる関係の構築につながられるものである。

今後は、評価表から対象者の変容の分析方法について検討していくことや、職員とのより良い関係性の構築について実践的な分析の在り方を明確にしていきたいと考える。それは、音楽療法のセッションの質の向上にもつなげられるものである。

参考文献・引用資料

- 中島恵子・山下恵子 (2002). 『音と人をつなぐ コ・ミュージックセラピー』, 春秋社.
- メルセデス・パブリチェック (吉田純子訳) (2006). 『みんなで楽しく音楽を！音楽療法士からの提言』, 音楽之友社.
- 日本音楽療法学会 (n.d.). 『特別プロジェクト特別委員会 (表 6～9) (要約)』, <https://www.jmta.jp/download/doc/20161115.pdf> (参照 2022-7-30)